

① 李 鶴来さんへ

こんにちは。私は高校1年生で戦争体験もなく、未熟ですが、あなたの証言を読み、衝撃を受けたので、お手紙を書かせていただきます。

私たちは、泰緬鉄道のこと、捕虜の労働や虐待について、朝鮮人のBC級戦争犯罪人はどのように処罰されてしまったのか、戦争の補償に関して調べました。捕虜の虐待はとてもひどくて聞くのも辛かった。しかし、虐待をする方も私たちには理解できない程の苦しみがあるのだとわかりました。命令する人は、自分は手を汚さずに、朝鮮人にやらせてしまえば良いという考え方は、許せるものではありません。自分がコリアンガードだったら、「やりたくない」という勇気は出せず、言われるがままにやっていたと思います。自分は命令に従っていただけなのに、死刑囚ホールに連れていかれた気分は計り知れません。もし減刑されていなかったら、日本に殺されたと言っても過言ではありません。私だったら、こんなことをした国の人々は関係なくても好きではいられないと思います。李さんは証言に書いてあったように、今でも日本人は好きですか。あなたはすごく適確な判断ができるし、感情的になって他の人に恨みをかけるわけでもなく、行動を起こすことができ尊敬します。

李さんの証言の中でも、特に許せないと思った事実は、「朝鮮人は日本人として戦争にかり出され、戦後も日本人として死刑や長い刑務所生活に耐えたにもかかわらず、サンフランシスコ平和条約で、戦後補償が受けられなくなってしまったこと。」です。私は、六十年間も謝罪と補償を求める要望書を無視している日本政府は許せません。日本政府はBC級戦争犯罪人として裁かれた人々が、生きている間に、絶対謝罪と補償をするべきです。亡くなられたあなたの友人の無念の怨恨が、癒やされる日が早く来ますように。

2003年生まれ、16歳、東京純心女子高等学校1年

② 李 鶴来さんへ

はじめまして、東京に住むとある高校生です。あなたの体験談を拝読し、筆を執らずにはいられませんでした。

恥ずかしながら、私は歴史に疎く、日本が戦争をしていた時に行った朝鮮の方々に対する暴挙をほぼ知りませんでした。ただ目を向けるのが怖かったからかもしれません。私は消えてしまいそうな過去と向き合うために、あなたの証言を手に取りました。自分の名を捨て、口車に乗せられて、辿り着いた先では罵詈雑言を浴びせられ、些細なことで暴力を振るわれる。病気になっても薬がないから諦めるしかない。上官命令に従っていたにもかかわらず、知りもしない条約で死刑にされる。今では考えられないような凄惨たるエピソードが続き、冷汗が止まりませんでした。この時の感情を、苦しいや辛いとありふれた言葉でしか表現できない自分もどかしくてたまりません。それから数日間、まるで心に鉛が落ちたようで、どうしてもあの衝撃を忘れられず、気付けば戦争のことについて考えていました。

少したった頃、李さんがラジオに出演し、BC級戦犯について語るという情報を耳にしました。日にちや時刻をしっかりと確認し、当日は番組が始まるのを今か今かと待ち構えていました。厳かな雰囲気の中で静かに進行していく中、李さんが毅然とした声で話す言葉一つひとつを、自然と反芻していました。獄中生活の詳細、出所後の苦難など興味深いお話ばかりでした。特に印象に残っているのは、牢屋に響く処刑の音です。カタンという音だけ聞こえるとおっしゃっていましたが、人を惜しむにはあまりにも軽く、尊い命を散らす音とは到底思えませんでした。あっという間に終わってしまったラジオの余韻に浸っていると、いつしか涙が頬を伝っていました。

狭間は見えづらいものです。しかしその隙間にこそ、暖かい未来を築くきっかけがあると思います。

2003年生まれ、16歳、東京純心女子高等学校1年

③ 李 鶴来さんへ

こんにちは、李鶴来さん。私は、貴方の証言を読んで初めて、朝鮮人戦犯となってしまった方々を取り巻く多くの問題を知りました。私は、今東京で暮らす高校生です。勿論、戦争を実際に体験していません。この問題は、そんな私にとっても衝撃を与えました。戦争について知れば知るほど、その恐ろしさ、軍やトップの人達の人間とは思えないような異常な行動に驚かされるのは毎度のことでしたが、朝鮮人BC級戦犯者問題は少し違った衝撃でした。

それは、日本人として罪を着せられたにもかかわらず、日本人なら受けられる戦後補償が受けられないという理不尽な点です。戦争中は国内も大混乱していて様々な不安から人々がおかしな感覚になってしまうことは想像できます。しかし、六十年以上も苦しんでいる元戦犯の方々の声を無視し続けている、というのは信じられないし、何よりも自分自身がそのことを知らずに生きていたことにも胸が締めつけられる思いがしました。

貴方の言葉を読むと、同じ境遇で亡くなった方々への思いもひしひしと伝わってきました。貴方のような方々が、民族に対する負い目を感じていることはあってはならないことだと思います。貴方の経験された苦しみは、私はわからないし、わかってたまるか、と思われると思いますが、亡くなった仲間や、故郷で亡くなった家族や同じ民族の方のことをずっとずっと想って、日本で問題を解決するために活動されていた貴方は、一番自分の民族を誇りに思っているように感じます。

貴方の力強い言葉を読み、戦争は本当の意味ではまだ終わっていないと思いましたし、今でも沢山の問題が残る日韓が、全ての問題を解決して両国に誰も苦しむ人がいない時代を実現させるべきだと思うようになりました。

ありがとうございました。

2003年生まれ、16歳、東京純心女子高等学校1年

④

私は長崎に住む高校2年生です。今の日本は昭和の戦後から一度も戦争をしていません。ですから私は戦争を経験したことはありません。そして、戦争の無いこの日本では死ぬことが隣り合わせになる生活をしていませんので、日本は平和だと私は思います。

李さんの手記を読んで印象に残ったことは、サンフランシスコ平和条約発効後のことについてです。李さんのような朝鮮人や台湾人は日本人としての国籍を失って補償などを受けられなかったことです。日本人ではなくなったという事実だけ聞けば解放されたというふうにとっても良いように聞こえます。ですが実際はそうでは無いのですから、理不尽でもあると思いました。私が李さんの立場だったならば、もちろん同様に怒りを表していたと思い、日本人として色々複雑に思います。

戦争は終わったかもしれませんが、戦争後の問題はいくらでもあるような気がします。やはり戦争は起きない方が良いです。どうしたら戦争は防げたのでしょうか、もしくはこれからの未来に起こりうる戦争を無くすことができるのでしょうか。李さんは手記の中で自分の責任は無いと思っていたと、書いていました。たしかに状況を考えればそうかもしれません。でも、相手からしてみれば死ぬのは最悪です。戦争を自らしたいと思うような人はあまりいないと思います。逆に平和について考えてみても少しぼやっとしていて考えづらいものです。

私はその人が持つ良心に従順であることが一番の戦争を回避する手段だと思いますがどうでしょうか。もし昔日本人に倫理観に従った行動ができていたら、戦争は起きなかったのでしょうか。考えても出ない答えに頭がぐちゃぐちゃしてきます。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑤

一九四〇年、今から八十年も前に、朝鮮人の人々が日本人と同じような名字に変えられて、もし変えなかったら差別的な扱いを受けるということを知り、私は驚きました。

私と同じ十六歳という歳で戦争を体験し、監視員に行ってきたときつい口調で言われて、逆らえない。自分の意志を伝えることができないという状況は、とてもつらいと思います。私は、自分の気持ちも人の気持ちも大切にすべきだと感じました。

野口部隊に入隊してからも二ヶ月間厳しい軍事訓練を受け、毎日殴られていたと知りました。何かあるごとに殴られたり、蹴られたり、とても痛かったと思います。対向ビンタという、お互いに向き合ってビンタをするのはつらかったと思います。

連れて行かれた場所は薄暗く、人が足を踏み入れないようなジャングル地帯で、そんな環境の中でどんどん飢えて痩せていきました。また、重労働をさせられて、マラリアや赤痢、コレラになると、薬も病院も無いので治療もできないまま多くの人が亡くなりました。今、もし風邪になったり、何か変わったことがあるとすぐに病院に行き薬をもらったり治療してもらったりできますが、この時代ではできなかった。今は普通だと感じていることができなかった。自分の家族や友だちと離ればなれになって、そんなさみしい不安な中で周りの人が亡くなっていくのはとても怖かったと思います。

私は、李鶴来さんの話を読んで、日本人は昔朝鮮の人にとってもとてもひどいことをしたのだということを初めて知りました。自分の気持ちを人にはっきり言えない状況はとても苦しくつらかったと思います。だから、私たちは平等な誰でも誰にでも意見を言えるような、皆が幸せな世の中にしたいと思います。

2004年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）